

第4講

島根にはじまる明治維新

長州藩の石見銀山奪還

島根県古代文化センター
矢野 健太郎

幕末維新といえば・・・

- ◆ 西郷隆盛 薩摩藩 (鹿児島県)
- ◆ 高杉晋作 長州藩 (山口県)
- ◆ 坂本竜馬 土佐藩 (高知県)
- ◆ 勝 海舟 幕府

**明治維新は全国的かつ劇的な
政治変革
社会変革**

幕末維新期の島根では

- ◆ 出雲国 親藩・松江藩の動向
- ◆ 石見国 幕長戦争の激戦地
- ◆ 隠岐国 隠岐騒動の勃発

幕末維新の情勢を決定づけた
「幕長戦争」を軸に
激動の島根の明治維新を紹介

幕長戦争（四境戦争）の状況



石州口の戦況 1

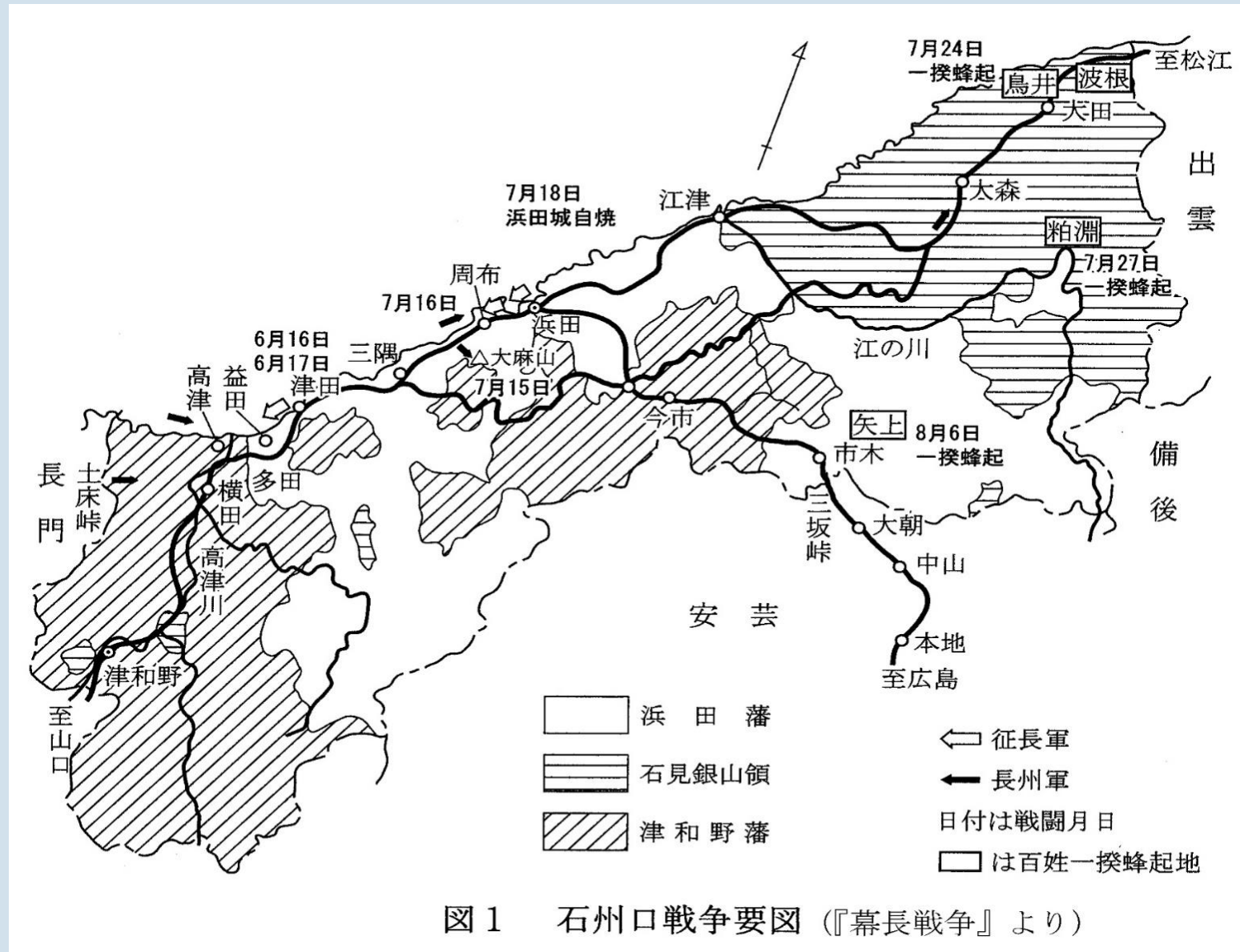


図1 石州口戦争要図 (『幕長戦争』より)

石州口の戦況 2

月日	地域	戦況
6/16～17	益田	長州藩 VS 浜田藩・福山藩
7/15～16	大麻山・周布村	長州藩 VS 浜田藩・福山藩・和歌山藩 松江藩・鳥取藩
7/16～17	周布村	長州藩と浜田藩の停戦交渉
7/18	浜田	諸藩の撤退と浜田城自焼
7/20	大森	代官鍋田三郎右衛門の退去
7/25	大森	長州軍の大森出張

史料の紹介

- ◆ 「石州口戦争彙事」

明治初年に毛利家が編纂した幕長戦争の石州口の戦いの記録

- ◆ 「松氏春秋」

浜田藩領の石見国邑智郡宮内村（美郷町）の医師松島益軒の記した日記体の記録

その時、津和野では



堀庭園（島根観光写真ギャラリーHPより）

その時、津和野では

◆ 津和野藩の選択

藩兵を城下に集め、長州藩との戦闘を回避した後に幕府から派遣されていた軍目付を長州藩に引き渡した

その一方、幕領であった畑ヶ迫村の堀家では……

その時、津和野では

◆長州藩 杉孫七郎の堀家訪問

「幕領畑ヶ迫と申ところへ今暁八ツ時より中隊を率ひ赴き、堀藤十郎、同又太郎呼出し…軍用金差出候様申し聞かせ候ところ…私共一己の了簡にはこれ無く、政府よりの内意もこれ有り候、穩に申し聞せ候間…一、二万金は且々差し出し申べきと察せられ候」

結果、堀家は軍用金を供出した

扇原関門 岸静江の奮戦



扇原関門 「岸静江戦死之地」石碑
(なつかしの国石見HPより)

扇原関門 岸静江の奮戦

- ◆ 扇原関門の戦い

津和野藩と浜田藩の境界の関門で、「石州口の戦い」の火ぶたが切られた地

- ◆ 岸静江

関門の守備隊長で孤軍奮闘し討死

- ◆ 長州藩の岸静江の評価

「関門守べからずと知り、守兵残ず差し帰り一人計り一死を遂げ候事」

大村益次郎の手紙

◆ 民家の焼失を懸念する大村益次郎

「十七日、昨日再び益田口攻め入り、… 何分敵兵初めより籠城の体にて、万福寺、正達寺の近辺、町家にて取り囲み候に付、大砲を用ひ候ては人家の焼失も計り難く、甚た攻め取り候に困り居り申し候に付…」

民衆の長州最前へ影響を与えた可能性

松江藩 VS 長州藩

◆ 松江藩 長州藩を撃退

「敵再内村之山ヨリ下リ、手銃ヲ以テ搏立候付、味方ヨリモ大小銃烈敷討立候付、追々敵間合遠ク退去候趣ニ候得共、猶人家或ハ藪隠等ニ潜伏致シ居候有様ニ付、内村ト申処へ人数少シ差遣シ人家放火致サセ候処、追々燃上リ賊徒大ニ騒立、手筒等打掛候へトモ、追々火勢盛ニ相成リ敵大ニ敗走、残ズ逃去候」

最新兵器 ミニエー銃

- ◆ ミニエー銃とは
銃身内部にらせん状の溝が施されており、椎の実型の弾丸に回転を加えて発射することで、射程距離と命中精度が飛躍的に向上させた当時の新型銃
- ◆ ミニエー銃の命中精度
「銃戦大概二丁ヨリ五丁位の距離ニテ装條銃狙い撃ち好く・・・味方手負等壱人のみ清末小隊、敵討死手負等多分これあり候事」

最新兵器 ミニエー銃

◆ ミニエー銃の射程距離

「我兵、装條銃至て能く打つ事妙也、遠間中り申候由、敵方よりの鉄炮此方へ届申さず候事」

◆ 益田で大流行した俗謡

「幕の御処置と装條銃（ミエーツツ）ハ中ニねじれた筋がある」

ミニエー銃の有効性と民衆への情報の流布の存在

浜田城天守は焼失したのか



浜田城跡（なつかしの国石見HPより）

浜田城天守は焼失したのか

◆ 停戦交渉

7月16日より、浜田藩と長州藩との間で停戦交渉が開始され、諸藩兵の撤退を条件に停戦とすることとし、回答期限を18日とした

◆ 「浜田城自焼」の報告

「右近将監様、城を明け逃られ候由にて…ミつから城へ火を懸ケ御逃げなられ候処、浜田一面に火に相成申候由」

浜田城天守は焼失したのか

◆ 周辺地域での情報

「浜田本丸より火を掛け落城なり、それより浜田の町人ども御兵糧蔵の戸を打破り、誰れ取れとも御触これ無きに、我もくと腕せんぎに米を盗み取る」

◆ 長州藩の報告

「今朝四ツ時頃より出火の由、城下二ヶ所より出火にて城内も焼候様子二相見、尤櫓ハ別条無くこれ有り候由」

浜田城天守が焼失していない可能性

幕府代官の退去

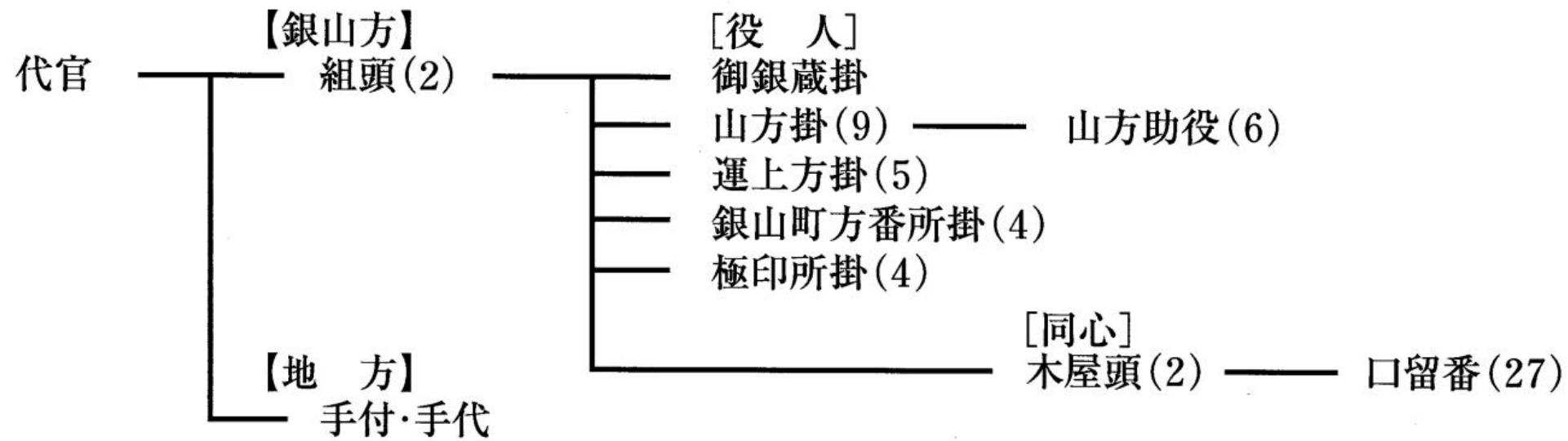


大森代官所

幕府代官の退去

代官所の職制

〈文化13年(1816)頃〉 ()は人数



【出張陣屋】

江戸詰 ……手付・手代

上下詰 ……手付・手代

幕府代官の退去

◆ 代官と地役人の逃避行

江戸時代の石見銀山には武士は100人足らずで、防衛が困難であったため、代官と地役人たちは御用金と重要書類を持って上下代官所（広島県府中市）を目指した。

政治的空白地となった浜田・大森に長州藩が進駐

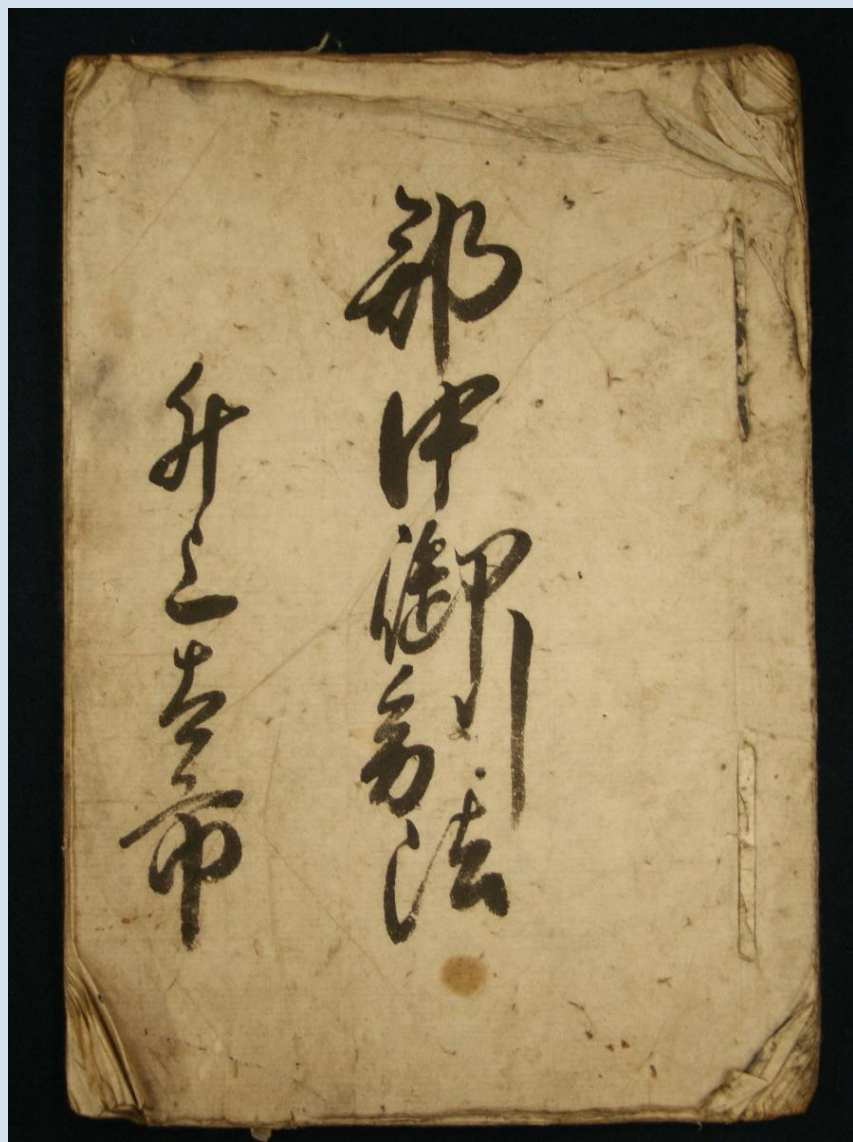
長州藩の占領支配

◆ 浜田藩領と銀山領での年貢徴収の諸相

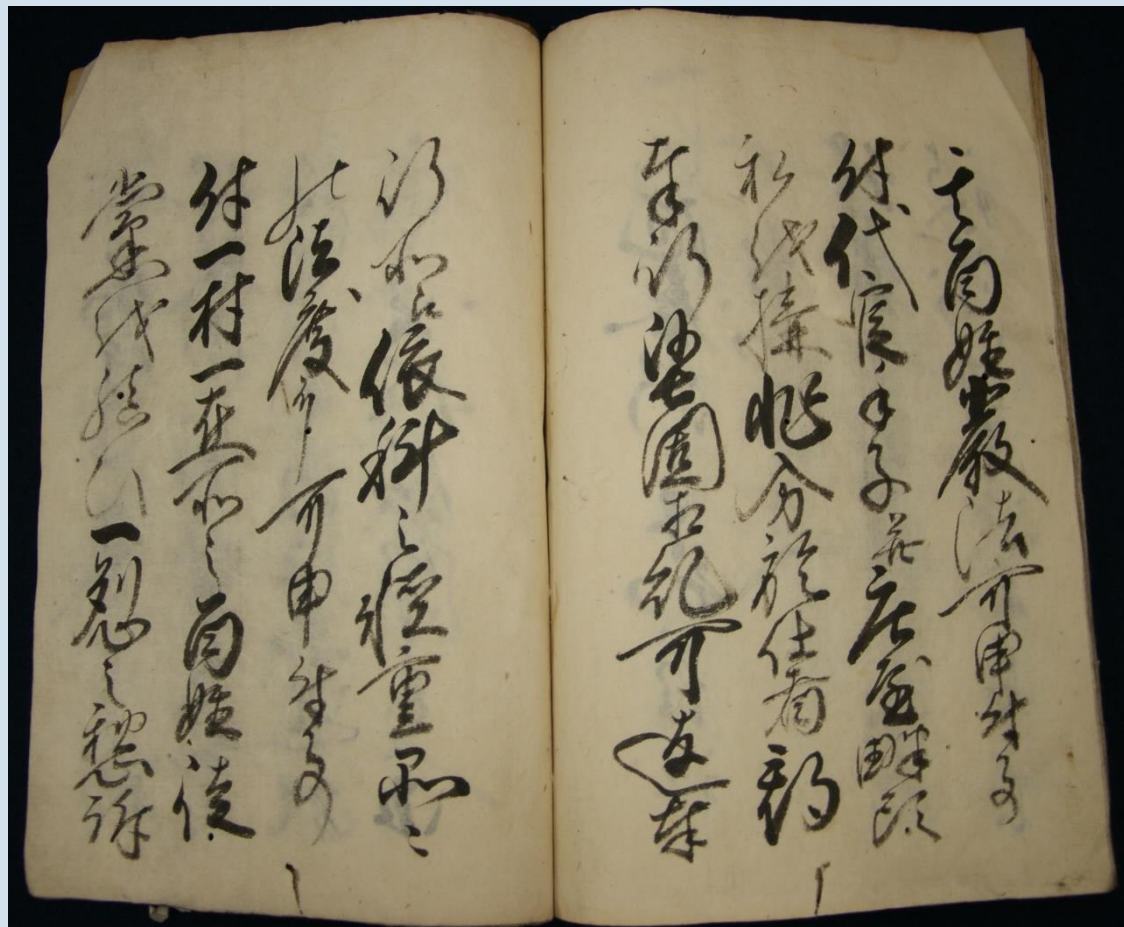
「この節浜田領大小の百姓一統、長州の仁沢を喜ぶ、六万石を五万石の御取立て、その上石四升掛りと申す、御用捨その外御救ひ数々なり
銀山領はこれに反し、御値段下げ、金歩戻などこれ無く、…一統迷惑の思ひを抱く、関東の御仁政今日に至り、俛ばしく思う由なり」

支配の基本方針は従来の体制維持と仁政

長州藩の「郡中御制法」



「郡中御制法」 (大田市所蔵)



2行目下 「畔頭」
(長州藩固有の村役人名称)

長州藩の「郡中御制法」

◆ 長州藩の預かり所へ

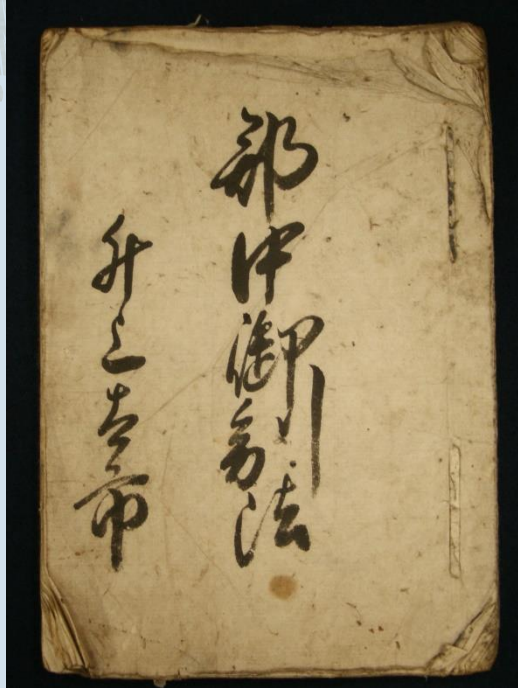
「豊・石両国ともに天朝より長州様へ御預かり所と相成り候廻文来る、当浜・銀両領の役人とも、廿八日大森本陣へ御喜びに出る」

◆ 「宰判」の成立

預かり地となったことを契機として、長州藩は固有の行政区画「宰判」を成立させ、石見国を長州藩の行財政機構への組み込みを図った

長州藩の「郡中御制法」

- ◆ 「郡中制法」の読み聞かせ
郡中御制法は、地方支配および農民統制に関する長州藩の基本法で、毎年正月11日に代官が村役人を集め、読み聞かせが行われた



読み聞かせ実施の可能性を物語る史料
長州藩同様の支配を目指す強い意志

忠孝談説法 佐伯八雲の暗躍

◆ 「松氏春秋」にみる佐伯八雲評

「長州より忠孝談と村々へ佐伯八雲と申す人廻在なり、如何様自国の自慢を交ぜ忠孝談上手の由なれども、大酒に耽り、…忠孝談も口中談なりと諸人悪説する由」

◆ 佐伯八雲とは

長州藩が派遣した忠孝談の説法を行う人物で、本人と弟子2名の旅費、人足賃が長州藩より支給されている

佐伯八雲の忠孝談の効果には疑問…

忠孝談説法 佐伯八雲の暗躍

◆ 佐伯八雲の会津落城談

「談上に云はく、九月廿三日、朝敵会津肥後守落城して、
… 会津侯父子城中に土穴を掘り潜み居り候由、実に
無武の至りなり、その外東軍皆降参なり、会津領また
また長州へ御支配に相成り候につき、豊石防長、会津
へ各出張所八十何ヶ所の由」

佐伯八雲を介した長州藩による情報操作
プロパガンダ的要素を持った可能性

占領支配がもたらしたもの

◆ 占領支配の終わり

「大森へ太政官権県知事と申す役にて牧音人（註・真木直人）と云ふ人来る … 又右牧音人大森に陣を居え、隠岐の国・銀山領・浜田領の兼権知事なり」

◆ 銀山領の年貢徴収をめぐる

「井戸谷隠居善右衛門と申す人… 伝馬入用…、六尺給米…、御口米…、小玉切賃…、御蔵米 …、御無理の御取立て、去る寅年より当巳まで四年分にて、国内にては金子に積もり拾万両余長州御引込みの由なり」

占領支配がもたらしたものの

- ◆ 明治元年大森宰判収支にみる長州藩への移送米金
米 20254石 → 2500石 (12%)
金 97178両 → 58700両 (60%)
- ◆ 長州藩へ送られた米金の行方
占領地を長州藩の行財政機構に組み込み、その収入で膨張していた長州藩の軍事費を支える構造

『戦争は女の顔をしていない』

岩波現代文庫 / 社会 295



スヴェトラナ・
アレクシエーヴィチ
三浦みどり[訳]

戦争は女の顔を
していません

- ◆ 戦争は女の顔をしていない
ソ連において第二次世界大戦に
従軍した女性達500人以上に
インタビューし、戦争の真実を
明らかにした作品

『戦争は女の顔をしていない』

- ◆ スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチ
ウクライナ生まれのジャーナリスト、作家。
ソ連時代とソ連崩壊後の個人と歴史を描く。
2015年ノーベル文学賞受賞。

史料を介して、過去に生きた人々との対話

長州藩士 長沼閏四郎 父への手紙

- ◆ 幕長戦争に従軍した一兵士の思い
「尤勝利と申物ハ難有ものにて、寒く相成候へハ衣類をもらい、兵器破ルレハ又是をもらふ杯有り難い次第第二付、御一筆遣さるべく候」

一兵士の戦争の勝利に対する素朴な思い
そうした思いの先にあるものは・・・

第4講

島根にはじまる明治維新

長州藩の論理は正義か？

へつづく

島根の歴史文化講座2023

《第4講》 島根にはじまる明治維新

長州藩の論理は 正義か？

島根県立古代出雲歴史博物館
専門学芸員 岡 宏 三



今回の視点

「英雄・偉人からみた大河ドラマ的歴史」ではなく、

「戦争下の地域に住む人々からの視点」を中心に
第二次長州戦争をとらえ直す

I. 第二次長州戦争にいたるまで

1. 長州・尊攘派公家、幕府に「攘夷
決行」を迫る

⇒文久3年(1863)5月に実施決定

⇒決行 長州・薩摩のみ

●孝明天皇強硬な攘夷は望まず、
「公武一和」での対応希望

2. 8月18日の政変

⇒長州藩・尊攘派公家、朝廷より
追放される

元治元年(1864)

3. 禁門の変 長州藩、京へ出兵

⇒敗北(朝敵となる)

4. 四国連合艦隊(英仏蘭米)下関に
報復攻撃

⇒長州藩敗北

5. 第一次長州戦争(長州追討令)

⇒長州藩降伏、三家老斬首

しかし

しかし、

6. 抗戦派(高杉晋作ら)と恭順派(椋梨藤太ら)の対立・内乱
⇒抗戦派勝利

7. 慶応2年(1866)4月
幕府、長州藩の藩主父子江戸引き渡し拒否を名目に再征令(第二次長州戦争)発令

8. それぞれの認識

①諸藩 恭順を示している以上、追討に大儀なし

②庶民 攘夷を主導する長州は正義

③長州藩の論理

(水面下では武備充実に努めつつ)藩主は謹慎恭順しているのに征討は理不尽。
仕方なく「防長士民中」が一丸となって防戦(武備恭順)

Ⅱ. 飯島与九郎の眼 からみた長州戦争

1. 飯島与九郎(利起。1825～ 1907)

楯縫郡猪目浦(出雲市猪目町)

飯島家7代当主

平野部に土地を集積

明治初期には北前船・釬も経営

元治元年(1864)楯縫郡組頭

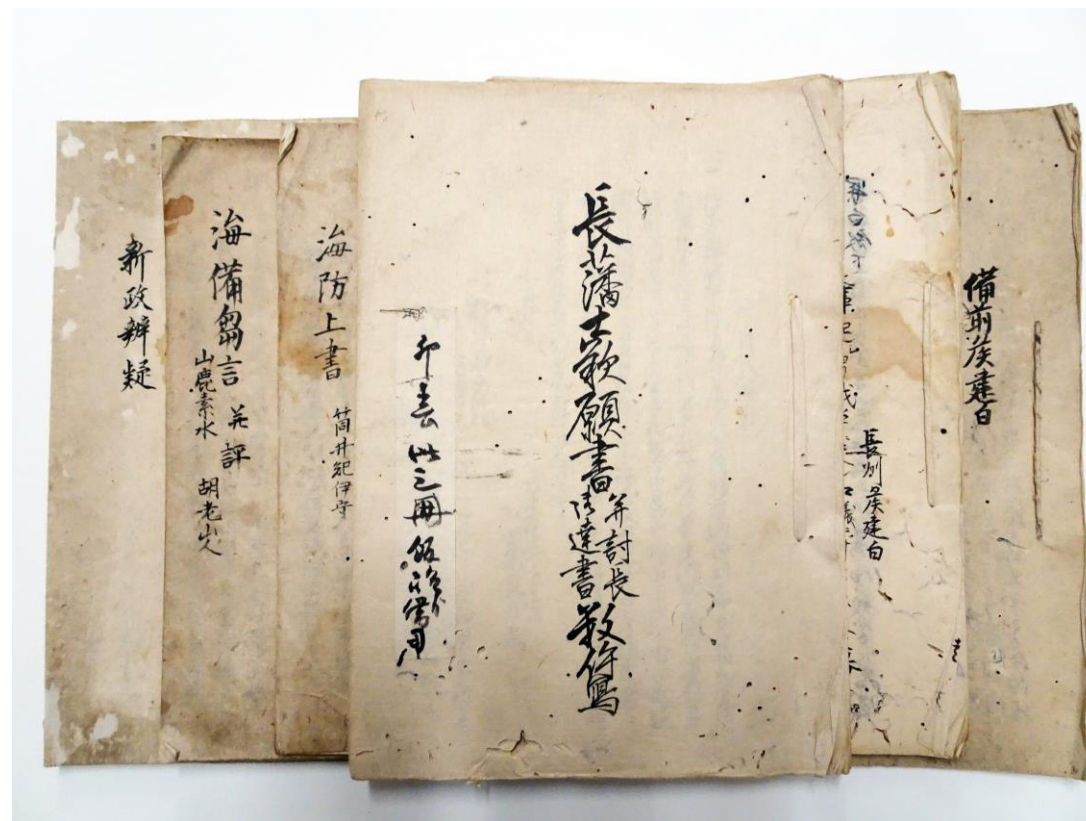
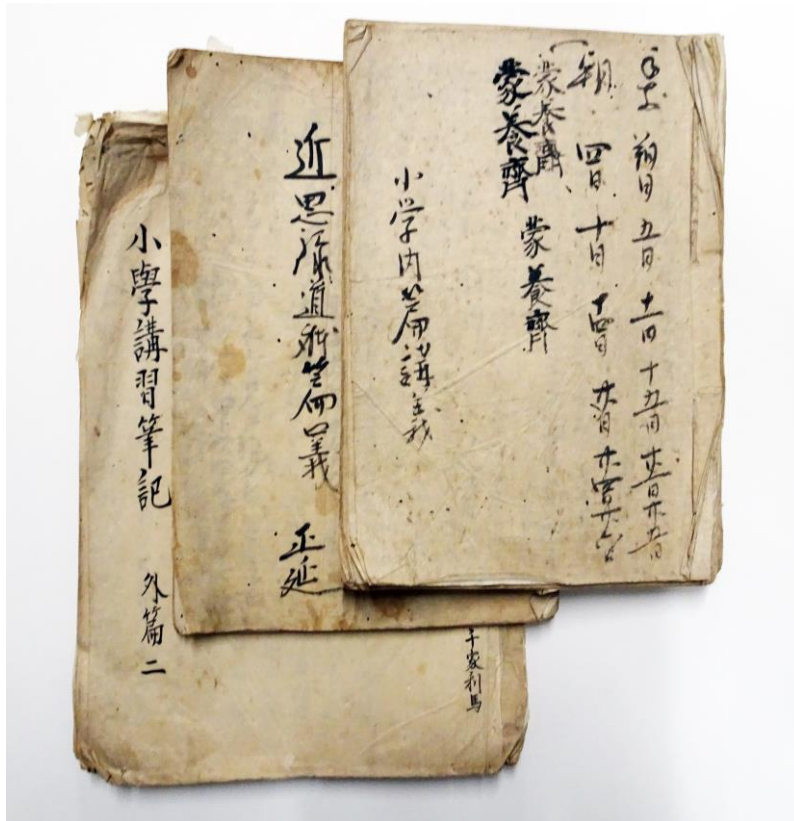
(下郡(大庄屋)の補佐役)就任



⇒「郡治の当事者の一人」の立場

2. 飯島家の教養と与九郎の知識

和歌俳諧の書だけでなく、崎門学(上官千家正延筆記の松井認齋・跡部良頭
の講義録)、海防上書(筒井政憲)、文久3年池田慶福ら諸侯建白、長州藩士
歎願書なども所有 ⇒ 高い思想・政治情勢に対する意識



3. 第一次長州戦争と住民

元治元年(1863)7月

長州追討令

11月 松江藩、農兵(郷夫)6,916人
を郡単位で松江に集結させる

5~8日、楯縫郡は771人を4日にわ
けて派遣

組親が20人単位で管理、飯の炊
き出しは白潟・末次の湯屋から支給
楯縫郡からは組頭飯島与九郎・同
木佐愛右衛門が統率して出府



郷夫出立の光景

園山貞造『鳶巣村歴史資料』
(明治31年(1898)次ページ⇒

郷夫と云へるは、凡そ郡民にして十五才より六十才迄ノもの(略)当籤者は十日間見込を以て交代するなり。(略)郷夫出立の夜となれば(略)竹貝を吹き鳴らし、郷夫の集来を催(うな)がせば、(此時郷夫は蓑笠を着し、飯骨柳に食物を入れて体し)、**左も哀れげに歩を致し**、杖つける老親、子を抱ける妻などに見送られて集り来り、悲声、果ては啼号の裡に松江を指して出づ。**惨然言ふ許りなし。**

(略)頓て松江城下に着するや、規定の宿屋に宿し、出陣の日を待つなり。

ところがいつまでたっても発令されない出陣命令

諸郡より郷夫繰出しに相成、松府ハ
■ ■ 賑ニ相成申上候、しかし松江初而之ものも数多事歟、**子供や犬大迷惑**之事ニ御座候、三十人五十人連れ、異風之形ニ而通行、珍敷事ニ御座候
⇒10日後、各郡にもどる
(飯島与九郎「長州御征伐被仰出一途」)

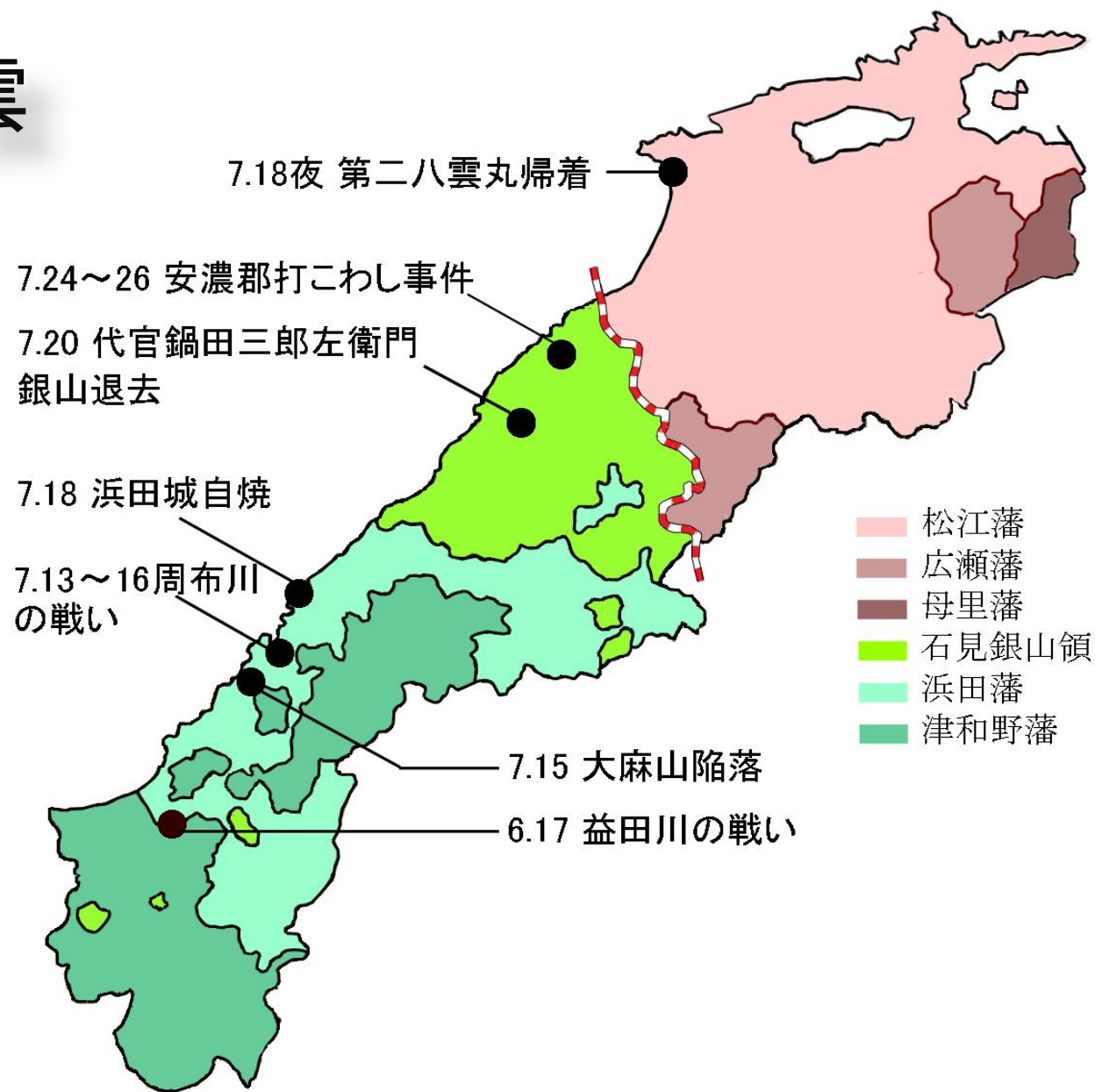
Ⅲ. 第二次長州戦争と出雲

当初は隣国西端国境での戦争のイメージ(対岸の火事)

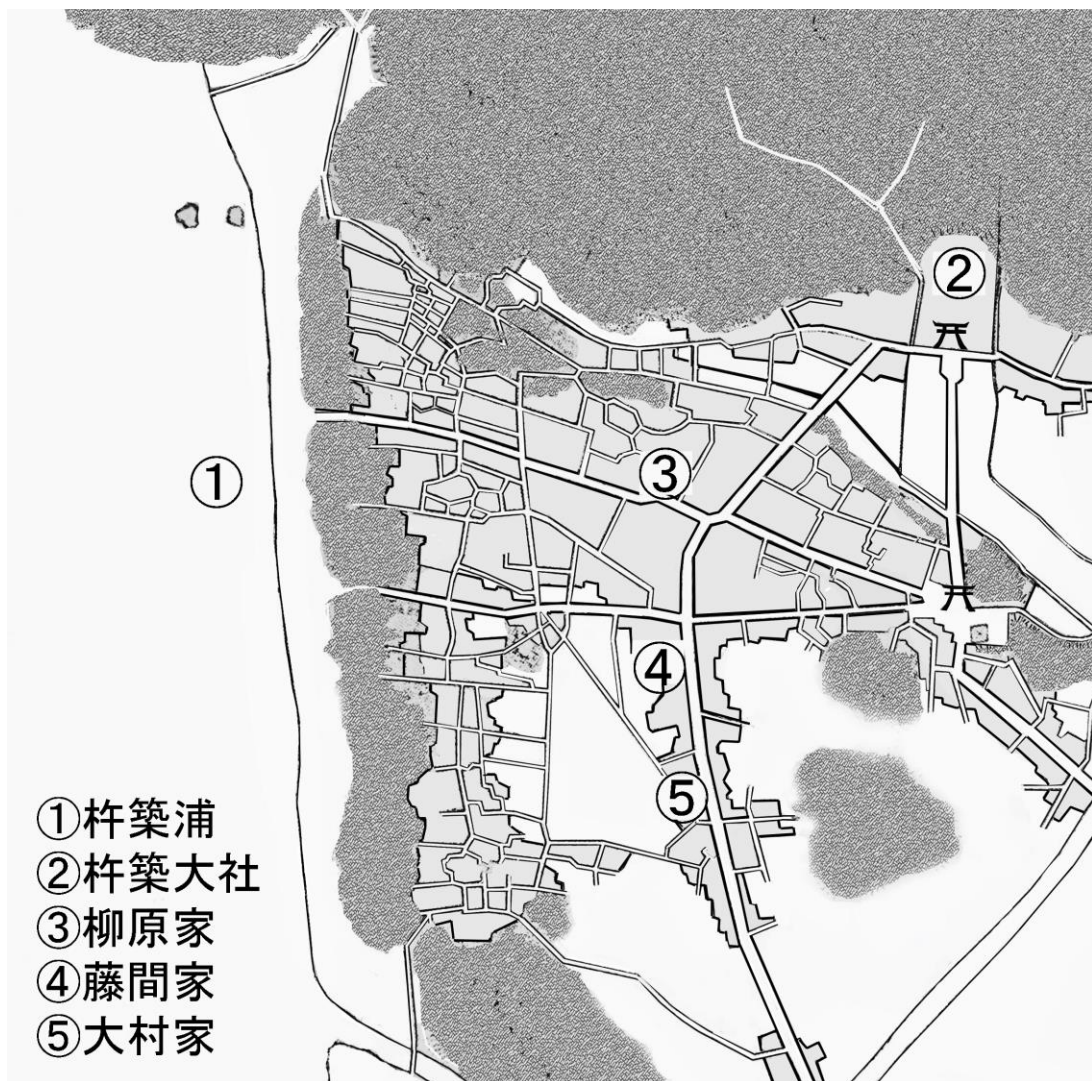
しかし、

7月18日、浜田自焼、同夜出雲(杵築)に敗戦の情報入る

飯島与九郎の対応は？(「見聞記」)



1. 杵築(出雲)大社に駆けつける与九郎



7月19日5ツ時(午前8時)杵築の柳原(松右衛門)より書状。

18日4ツ時(22時頃)松江藩蒸気船(第二八雲丸)浜田から杵築浦へ帰帆、敗戦の報せ。「追付け賊徒押し寄せ申すべし」

浜田侯家族らは藤間家にお入り、小田要人(仕置添役、合戦監察役)は柳原家に着陣

⇒与九郎、朝4ツ時(午前10時)

杵築へ出立

2. 大社の光景



藤間家



諸士様方大社へ夥しく詣で候。もっとも19日雨天のところ、戦士方乱髪にて、緞子陣羽織のみにて雨具なし。無ぼく(僕)にておもひおもひのいでたち参詣、**身の毛もよだつ有様**にござ候。

③石原市之進(一ノ先隊副将)の演説(柳原からの手紙)

(前略)浜田落城におよび、さぞ杵築
辺へも火の手あい見へ候や。(略)
味方勝利に相成るべく候ところ紀州
勢臆病、長州勢押し寄せ候えば逃
げ道争い、それより惣敗軍と相成り、
福山勢大半国本へ退陣、御国(当
藩)人数も引取り、御国固めのほか
他事なし。

もっとも大野舎人(一ノ先隊士大将)

は「今一応合戦いたし候上ならでは
退陣申さず」と押し切って申され、漸
う80人辻にて出陣。

此の上は雲州の急難近くにこれあり、
追っ付け賊徒押し寄せ申すべしと一
同覚悟あい究め、戦い切りまかりあ
るべし。

柳原⇒側にて承り候

④杵築市中を取材する与九郎

7月20日

柳原家在陣の小田要人に陣中見舞
隊士(乙名衆)岡谷昌左衛門の話
「長州勢と申すは士列などではござ
無く、農兵に違ひなく(略)炮術は絶
妙、山道自由自在、働きよく身を隠
し、人間業とは見えざる(略)炮発雨
霰の如く、誠に誠におそろしき」
同日、浜田侯の御手元金を積んだ
小舟、「落人の有様」で着船。

22日、鵜龍(宇竜)浦へ浜田落人小
船18艘(老若男女500人)入港
鷺浦に男女子供50人着船
「男女とも、銘々剣刀・槍等杖につき、
哀れ至極の有様にござ候」
24日、「石州落人五六百人入り込み
御士も多人数。三人五人、又婦人方
はそれぞれ三十人、三十人合い宿
手配。宿料壺人六百文ツゝに
仰せ出され候。

⑤ 浜田藩落人の心情

「浜田におゐて、長防方へ少しも遺恨これ有るわけハ更にこれなきところ、

此のたび公議より長防征伐仰せ出され、惣方出陣に相成り候につき、長州より押出し、浜田落城におよび候上は、きっと公議へ歎願いたし、これまで六万石は十万石にも仰せつけられたく、もしまたお聞き届けこれ無きにおゐては紀州へ申

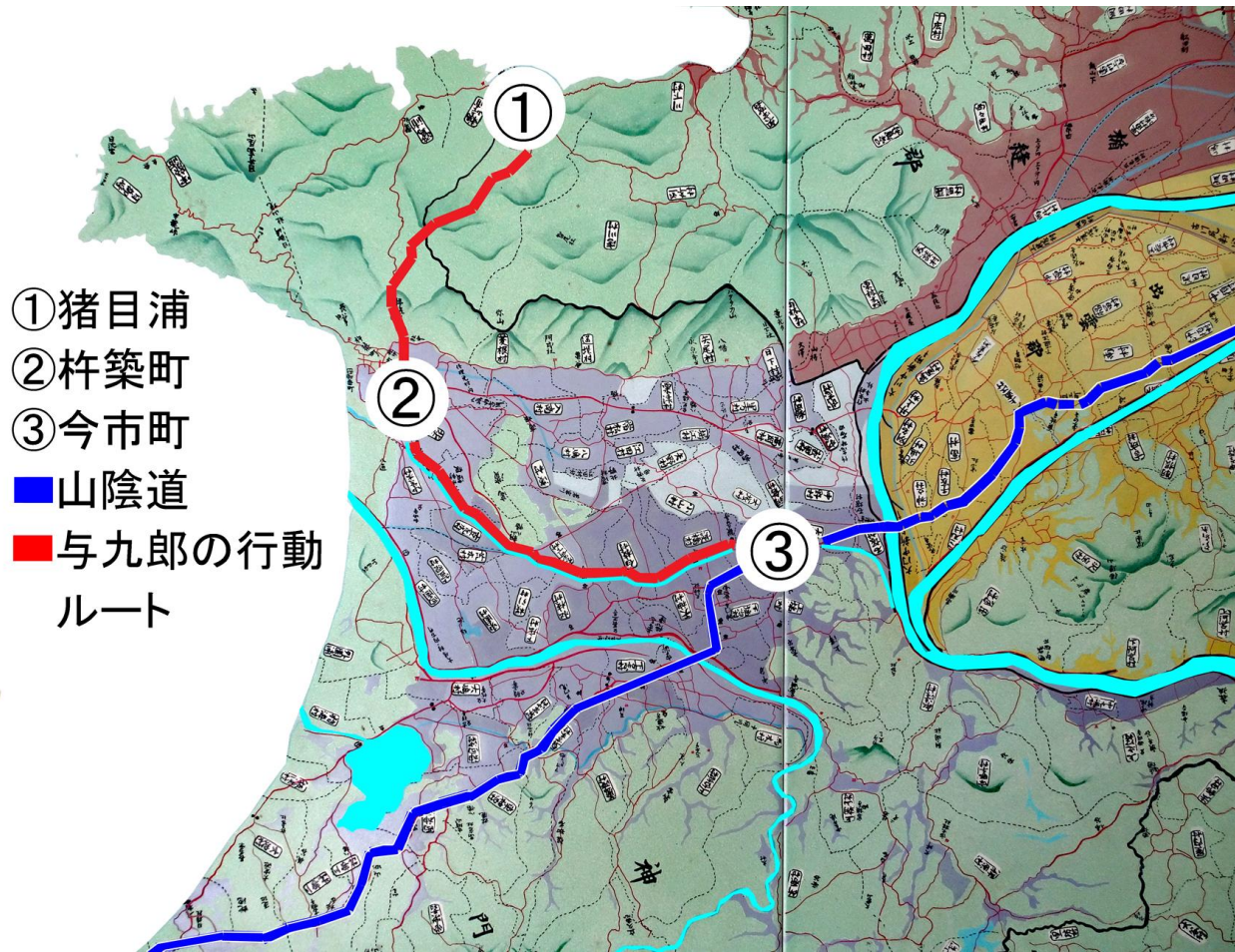
し出、それとも(貪)頓着これなく候へば覚悟あい極め申すべし」

との一家中決定とあい見へ申上げ候。長州恨み候場は聊かもこれ無き由。



⑥今市を取材する与九郎 一鳥取藩兵の駐屯一

7月23日、与九郎、今市に出向く



長州追出として因州勢今市へ惣勢
貳千七百人余出張、郷夫(人夫)渡
橋辺に逗留。近在陣所見分に、百
人辻、近在町口々へ関所あい建て、
嚴重あい改めの事
夜、石州へ先立ちて繰り込みに相成
り候因州勢貳千人余今市へ退陣。
都合**四千人余五千人**辻暫時今市へ
在陣。

* 明治初期の今市の人口、
約4,000人(『神門郡村誌』)

⑦ 混乱する今市市中

今市は斯くの次第御在陣
(略)廿一日夕方より俄かに頭
分(富裕層)より先だって家財
諸道具・敷もの・建具に至る
迄残らず町放れの所、又は
遠方親類家などへ運送。廿
三日、自分今市へ参り候節
にも、高瀬船等其のほか銘々
荷負い、騒ぎなる事にござ候。



川瀬高町市今雲出



廿三日、自分今市より帰路
(略)高瀬(川)通り、杵築市場村
へ通り懸かり候ところ、大村覚
三郎方、かねて燈さの(燈さぬ)
燭台など数々燈し、長持箆笥、
櫃類とも莫大荷出し二付、聞
き合せ候へば、今朝より出入
もの多人数呼び寄せ、諸道具
かた付け、金銀其のほか極く
大切なものは残らず屋敷中へ
掘り埋め候よし。

⑧ 決戦の準備



■ 松江藩

7月20日、銀山領柳瀬⇒波根に在陣

23日、遊軍、久村に繰り込み

■ 鳥取藩

同23日、今市近在陣場見分、山王山と大念寺山の間に壱ヶ所、町下モに壱ヶ所塩冶馬場宮山に壱ヶ所戦所決定に相成り候事

24日、石州から引き上げた鳥取藩兵も、知井宮・古志に在陣

ところが、

廿五日五ツ時(午前8時)頃より石州に火の手あい見へ候ところ、多分大田または波根両所の内と申す事にござ候(略)暮におよび候まで黒煙あい立ち候ところ、山火事とはあい見へ申さず

⑨銀山領で打ちこわし勃発・奇兵隊登場

七月廿四日夜、石州石田や(鳥井村)にて、都合拾八ヶ村百姓共(略)屯集、男女共三千人辻と御噂に候

(25～26日)打ちこわし地域

大田町、西川村、久手町、**柳瀬村**、和江村、静間村、西村、**波根村**、才坂村(大田市街地・北部沿岸地域)他

浜田札に喜平対(奇兵隊)裏判いたし、通用申し付け、追って長州引き替え申すとの事

先だって(21日)大森代官所へ長州騎兵隊(奇兵隊)貳拾人ばかり入り込み、御代官へ対面いたしたく申し出候につき(略)御用達熊谷三左衛門出られ候ところ、「石州諸色高直(値)につき万民困窮に候あいだ、米直段下直にいたし候よう、いづれ遠からざる内に又々まかり出候あいだ、人夫三百人手配くれ候よう」と申合わせ、逃げ去り候よし。

IV.石見の混乱 銀山領

①幕府軍・長州軍の集結、交戦

⇒米穀をはじめ物価の高騰

②浜田藩主・銀山代官退去

(統治機能の崩壊)

●紙切れとなった「浜田札(藩札)」

⇒浜田領・周辺地域に影響

●代官鍋田三郎右衛門、前年度年貢米五千石の平等割を指示し退去

⇒直後に長州占領。分配の再指令は7月晦日になってから。

③松江藩兵の波根退去

⇒磯竹・波根の住民らに「窮民取救」として米5石5升(ただし9月まで長州が管理)、金700両を支給するも、一揆の混乱を收拾出来ず、出雲へ撤兵
(「石州大森長州本陣民政方沙汰控」ほか)

④長州側(奇兵隊)の対応

・一揆への対応

「此のたびの一揆の儀に付ては余儀なき次第」と理解を示しつつも、「徒党頭取張本の者召し捕り(略)罪状明白にあい究り候分は、急に両三人斬首獄門致させ、一統え布告仕らず候らわでは余燼あい発るも鎮静方むずかしく候あいだ、此の段前もって御承知に入れ候」(8月4日、8日大村益次郎より本藩国政方へ書状)



中原金九郎「長征風聞日記」(銀山領邑智郡潮村(美郷町潮村)の庄屋)
「長州様御三人御出、段々と御意見もござ候えども、一向に承知申さず(略)余儀なく三人御切捨て遊ばされ、また鉄炮を以て打ちころされ候ものもこれあり」

石見の混乱 浜田領

佐々田類三郎『長征石見戦争聞書』
(津和野藩領那賀郡木田村(浜田市
旭町木田)の庄屋)

8月11日、浜田へ長州から荷揚げの
塩の売却にあたった泰助の書状写
し

浜田表西方十一ヶ村百姓一揆、一
昨夜より長州御勢おさへに御出候と
ころ(略)近在も追々押出し候おもむ
き、右趣意は「このたび長州様、諸
道具ならびに米類、浜田領船持残ら

ず長州へ御積み取り遊ばされ、浜
田の国から物に相成り(略)札は御引
き替えこれ無く、売り物は売れと御
沙汰のみ。埒明き申さず、**必至の差
し問え**(略)先殿様より錢(餞)別金(略)
村方へ下ち申さず、夫飯米壺人に付
き式升宛下り候分村方へ下されず」

同日夕方、城下に迫る一揆勢に長
州兵発砲、5人即死。
(別史料では3~4人)

V.情勢の膠着 出雲側

■鳥取藩兵の動揺

7月晦日、脱走因州藩士(攘夷派の詫間樊六ら)22名加賀浦(松江市)に入津

8月朔日、松江藩、各郡役所に警戒の触を出す

3日、因州藩士手結浦(松江市)に入津、今市駐屯の鳥取藩兵、同地に出動(到着前に詫間ら5人討死、残りには逃走、石見で長州軍に合流)

■松江藩兵の疲弊

8月中旬「郷夫などは田儀にても五人ふとん壺枚、四人に壺枚仕る事。もっとも間には土間に藁を敷き、其上蓆敷き、郷夫宿仕り候
山口町(三瓶山東麓)は人家十軒余これあり(略)郷夫泊り所は新たに四笹小屋にわら蓆敷き住居。雨天は雨もり、山中に候へば(略)最早霜も降り(略)数多の病人と申す事にござ候」

情勢の膠着 長州側

8月12日

浜田より本藩御用所役あて書状

「当地屯州の兵(略)追々浜田其のほ
かへ操り上げ候に付き、**当地兵数甚
だ減少**、且つ右の次第兵にては諸々
へ出られ申さず(略)**瓦解の儀も甚だ
案ぜられ候**」

同日

大村益次郎より国政方へ書状

「**軍半ばに百姓一揆**の始末、極々方
正に行われず候ては戦争の支りに
も相成り(略)**追々面倒の儀差し起こ
り**、困り申し候」(「石州大森長州本
陣民政方沙汰控」)

事態の急変

8月21日

34日ぶりに猪目浦に
戻った長三郎の報告



8月4日

田儀仙山へ山狩りに田儀詰め諸士様方御上りに付、歩兵御供にて上り候ところ、壱人谷水へ水呑みにおり込候へば、長州襲来、取り廻し候に付、大声いたし候へども聞ひ申さず、終に久手村まで連れ帰り

酒肴あい贈り饗応。色々当国の様子あい尋ね。

(略)此の節不快、引き籠もり居り、今日山上市御供も断り致し候へども、強いて申し付けられ、よんどころなく上り候よし。

三日めに書状あい認め、持たせ、差し返し候。

四日に石州久手へ連れ帰り候歩兵は出雲郡のもの、歳は十七才。

■長州側の書状

仙山口御出張(略)御自国御警衛の御主意に候わば早々御国酒井まで御引き取り下さるべく候。もつとも御進軍に候らえば、敢えて辞せざるところに候

■松江藩側の返書

自国の警衛にて進軍の趣旨にはこれなく(略)もとより貴藩と私怨を結び候筋かつてこれなく(略)貴藩御処置次第如何様ともあい応じ申すべし

VI. 休戦交渉



①8月21日

第1回交渉(広瀬領赤名)

相互不可侵の確認

松江藩、幕兵の出雲退去了承

■8月26日 長州出張本営⇒松江藩に書状
(出雲石見間住民の通商は)「方今の形勢
に候あいだ、行商人入り交わり候ては、差
し纏れも計り難く」猶予されたい

■同晦日 松江藩⇒長州出張本営に書状
「戦争中たりとも下民の生業を妨げ候は
不仁の至。御互いに上にてあい和し居り候
えば、下にて少々の違失出来候とも、政を
施し候事はこれ無き筋(略)差し免るされ候
は則わち天下の正義と存じ候。」(毛利家文
庫「四境戦争一事 石州口」)

②10月11日

第2回交渉(広瀬領頓原)

長州側 鳥取藩へ使者派遣のため

出雲通行認可を要求

松江藩⇒天幕(朝廷・幕府)に伺った上で回答

松江藩 通船通商(特に下関)の示談を要望

(『松平定安公伝』)

同17日、石州口軍監参謀杉孫七郎書状「雲州応接大きに穏やかにいたし(略)御懸念成されまじく候」

■下関の状況

8月17日、鵜峠浦船応永丸より出雲に帰帆の祇園丸に託した書状

「小倉落城後、御用夫に取られ、小倉へ日々郷夫に参り、夥しき武器類・大煩(大砲)等日々下之関へ積み送り(略)下之関諸国滞船大小ともに千艘辻、先だって頃は一艘に付米4斗ずつ搗かせ(略)もつとも喰い呑みの上、搗き賃六百文ずつ遣わされ候よし」

③12月7日・④ 28日

(12月5日一橋慶喜将軍就任)

第3回交渉(広瀬領頓原)

第4回交渉(銀山領大田)

長州側 幕府の長州再征危惧、松江藩の去就を懸念

松江藩 **天下の公論**により**大本立ち**、**正理**明らかとなれば、それに従う鳥取藩への使者の出雲通過は現状拒否(『松平定安公伝』)

* 幕府・朝廷の命令でなく「天下の公論」で正しい判断をすべき

⑤慶応3年(1867)12月6日 *

第5回交渉(田儀 青龍寺)

長州側 両藩親睦し、禁裡守護として共に藩兵を上京させたし(長州藩兵の通行要求)

松江藩 通行の可否は朝廷における長州藩の処遇の決定後に判断(10月15日大政奉還、12月8日毛利父子の官位復活、上洛許可、)

⑥12月23日

第6回交渉(浜田)

両藩親睦確認

第5回交渉の様子 飯島与九郎「見聞記」

松江藩、ただちに杵築から芸者5人、酌取り・給仕人は今市・田儀で手配。「密談これあり候。委細は少しもあいわからず」「あとは酒狂と相成り(略)長人貫刀にて様々を踊り舞い、終には台所へ出、真名板を切り、鯿などをためし切り(略)終には壺朱銀などまき散らし(略)女芸者(に)生国あい尋ね候につき、「京大坂、尾の道辺り」など申し出候えば、



「いづれ**来春大坂は大変出来候**あいた、必ず必ず大坂へは帰らざるよう、きづきにて住居いたしてくれ」など、申し聞かせ候よし」

⇒1月3日**鳥羽伏見の戦い**

VII.まとめ

■庶民の心情

「禱家順番帳」(1709～1935年にかけての杵築・大土地神楽の禱(頭)家順番帳)

「此の年秋、米綿とも大不作(略)誠に下万民は大難渋、困窮の至りに候。もつとも百姓方は郷歩(夫)あい当り、夥しき人数繰出し仰せ付けられ(略)人雇ひ賃・諸職人作料等も甚だ高直(値)に相成り、諸色等は四倍

・五倍増しも相成る品もこれ有り候(略)杵築市中も至って淋しき事にござ候。なにとぞ静謐に相成り候て、元の如く米穀諸色とも下直に相成り、神楽神事式賑々しく仕り候よう、ひとえに御神明を祈り奉り候なり」

⇒人夫徴発・狂乱物価・生活統制

⇒戦場となった地域は深刻悲惨

幕府の信頼、致命的失墜

⇒倒幕へ

■長州藩の内部情勢

- ①慶応2(1866)年3月 奥阿武郡弥富村(山口県萩市)百姓騒動
⇒巨魁の者七郎左衛門・虎太郎・勘吉と申すもの(略)既に脱走せしめ候よし(『諸隊関係編年史料』)
- ②諸隊の脱走・横暴
同年4月立石孫一郎(備中国庄屋養子)ら約90名脱走、備中倉敷で暴動(長州へ戻った際に射殺、他2名斬首)

- ③帰還した脱走兵の処罰(同月)
集義隊 (巨魁3人)割腹致させ
義昌隊 (誘引1人)割腹致さしめ
八幡隊 (巨魁5人)斬首、陣門内において梟首(『同』)
- ④疑心暗鬼の悲劇(大島)
同年7月13日 大島和田村の庄屋利右衛門、敵に与した疑いで暴行による詮議。翌日縊死。
同月屋代村、間者と疑われた地方組作右衛門、百姓らに打ち殺される(「榎村正直蔵書雑載」)

更に検証すべき事柄

直接戦争の影響を受けなかった地域には「幕府に立ち向かった正義」に映るが、

1. 防長領内において

- ①禁門の変出兵の戦費
- ②下関戦争の軍備の経費
- ③列強5ヶ国への賠償金300万ドル
(支払の多くは幕府・新政府が肩代わり)

④第一次長州戦争後、長州藩各所での、恭順派・抗戦派の内乱による被害

⑤薩摩藩を介してミニエー銃4,300挺・軍艦乙丑丸購入

⑥奇兵隊をはじめ領民の諸隊入隊

⇒これらの膨大な負担・犠牲を担ったのは誰か？

(防長の在地史料の検証)